

豊島与志雄著作集

第四卷——未来社刊

豊島与志雄著作集 第四卷（小説Ⅳ）

一九六五年六月二五日第一刷発行

定価 一、八〇〇円

著者 豊島与志雄
発行者 西谷 能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三の七
振替・東京 八七三八五番
電 (八二) 充矣・(八三) 器器

本文製版／山洋印刷
本文印刷／萩原印刷
装釘・装本・口絵印刷／形成社
製本／今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえます。

検印廃止 ©Y. Toyoshima



監
修

山本有三

鈴木信太郎

川端康成

小林秀雄

編
集

中島健蔵

平野謙

花田清輝

豊島清史

凡 例

一、本著作集は、豊島与志雄の小説・戯曲・詩・評論・随想のほとんどすべてを、系統的に編纂し全六巻に収録するものである。

一、本著作集は、すべて現代仮名づかいにあらため、漢字は略体で統一し、拗掟音を使用した。ただし、著者の文体を尊重して送り仮名は原文どおりとし、また、制限漢字外のものそのままとした。

一、初出原本で明らかに誤植と思われるものは、これをあらためたが、いちいちことわってはいない。著者独特の表現法は、すべて原文どおりにした。

一、カギ括弧、句読点等の用法は、全巻にわたって統一をとった。

一、各巻末に、各時期の作品に触れた「解説」を付し、第六巻には、豊島与志雄の詳細な作品目録・年譜等を付して、読者の便をはかった。

一九六五年六月

豊島与志雄著作集

第四卷

小説Ⅳ

目次

浅間噴火口	二
在学理由	三
鳶と柿と鶏	三
三つの嘘	四
椿の花の赤	四
三つの悲憤	五
碑文	五
立札	五
画舫	六
白塔の歌	六
変る	一三
秦の憂愁	一〇
秦の出発	二九
塩花	一四
乾杯	一五
沼のほとり	一六
渡舟場	一六

古	木	二六
旅	だち	二八
崖	下の池	二九
波	多野邸	三〇
高	尾さんげ	三九
白	藤	三九
白	蛾	四〇
落	雷のあと	四一
水	甕	四二
非	情の愛	四三
道	標	四三
未	亡人	四四
早	春	四九
朝	やけ	五〇
白	木蓮	三八
聖	女人像	三九
土	地に還る	四〇

紫の壇	三六九
祭りの夜	三六九
花ふぶき	三六六
自由人	三六五
ヘヤービン一本	三六五
小さき花にも	三六四
猫捨坂	三六三
山上湖	三六二
蔵の二階	三六二
解説 花田清輝	三六二

豊島与志雄著作集 第四卷 小説Ⅳ

——一九三九（昭和一四）年一月～一九四九（昭和二四）年四月

浅間噴火口

一

坂の上の奥まったところにある春日荘は、普通に見かける安易なアパートであるが、三つの特色があった。一つは、その周囲や庭にやたらと椿の木が植えこんであること。これは、経営者たる四十歳を過ぎた未亡人椿正枝の、感傷とも自負とも云える事柄で、はじめは椿の姓にちなんで春木荘と名づけられそうだったのが、春日荘となった代りに、多くの椿の植込が出来たのである。花時には、赤や白の一重や八重が美事だった。次には、室代が他の同類のアパートより少し高いこと。高いといっても一畳につき二十錢程度だろうが、それでも居住人選択のためには多少の役割をなした。第三には、一種の道徳が居住人全般に課せられていること。例えば、アパート内では禁酒であり、外泊の場合は必ず、予告するか電話をかけるかなければならず、其他これに類する事柄である。女の独り者は、下等な妾か女給のたぐいだとして、居住を許されなかった。その代り、正枝は凡ての居住者を、道徳的には嚴格に人情的にはやさしく、親

身に世話してやった。月に一円女中に払えば、毎朝室の掃除もして貰えた。

居住者の李永泰が、無断で三日も帰って来ず、何処へ行ったか分らなくなったことは、だから、春日荘にとっては稀有の事柄だった。正枝は女中のキヨを連れて、李永泰の室を検分した。

「毎日掃除をしてるんだから、ふだんの様子は知ってるでしょう。なにか変ったことはないか、よく見てごらんさい。」

「はい。」とキヨは頓狂に声高な返事をした。

八畳のうち一畳半ほどを、沓脱と簡単な炊事場とに切取った、正面一杯が硝子戸の室である。書棚、机、茶箆筒など、粗末ながらととのつていて、押入には、布団や支那カバンや行李、それからまた沢山の書物。殊に総合雑誌の類が堆高く積み重ねられ、小さな紙片が、総のように頁の間から差出ている。丹念に読まれて所々に目印の紙片が貼りつけられているものらしい。——それらの雑誌については正枝にも覚えがある。或る時、警察署の特別高等係という肩書の刷りこんである名刺を持った訪問者があった時、李は長時間話しあ

っていたが、客を玄関に送り出して、それから正枝に云った。「思想のこと心配して来てくれたんです。いろいろ話してやると、喜んでくれました。その方面のこと、僕の方がよく知ってるんです。おはさん、来てごらんない。」そこで正枝が彼の室までついて行くと、頁の間々に紙片の貼りつけてある雑誌が沢山取り散らしてあり、彼はそれを指し示して自慢していた。それでも正枝はまだ不安心で、其後特高係がまたやって来た時、そつと李のことを尋ねてみると、なかなか勉強家で有望な青年らしい、との返事だった。客と李とは笑い声など立てて親しげな様子だった。

室の中の有様を、正枝はひとわり見検べたきりで、何物にも手を触れはしなかった。だが、柱に下つてゐる短い竹筒だけは、訝しげに取上げてみた。それは尺八だった。竹の肌艶といい根節の恰好といい、素人目にも美事な尺八で、紫の絹の組紐で上の方を結え、柱の釘にぶら下げたのである。

「ま、尺八だよ。吹けるのかしら……飾りのつもりかしら……。」キヨが何の反応も見せなかったので、正枝は尺八を元に戻し、なお室の中を一通り見廻して、それから出ていった。

結局、発見は尺八一つきりで、彼の出奔或は失踪については何の手掛りも得られなかった。外泊の場合は予告するか夜遅くとも電話でもするという春日荘の立前は、彼も充分に知っていたながら、もう無音のまま、三日にもなる。いつもの通りぶらりと外出したきりで、室の有様も平素の通りだとキヨは云うし、また、近頃なにか変わった様子も見えなかったのである。

「だけど、もとからちょっと変な人ではあった。」と正枝は考え

てみる。

一年ほど前に李は春日荘に来たのである。

室をお借りしたいという人が……との女中の取次に、正枝が出て行ってみると、学生服の髪の高い青年が、胸のところに帽子を両手で持って、玄関の真中につつ立っていた。正枝は彼を玄関の横手の椅子に招じて、そこで、如何にも春日荘風な応対がはじまった。

「学校に通つておいでになりますの。」

「そうです。」

「学校はどちらの……。」

「明治大学の法科です。」

「お国は……。」

「朝鮮です。」

そして彼は、毛筆で氏名だけ記入した小さな名刺を差出した。美事な筆蹟で李永泰としてあった。

正枝は改めて相手を眺めた。眉目のくつきりとした白皙の秀才型の顔に、どこかのびやかな而も野性的な気味が漂っていた。言葉もはつきりしていた。正枝は暫く黙っていたが、やはりいつもの形式通りに押し通した。

「あの、どなたか、こちらを紹介なすった方がおありですか。」

「人から聞いて来ました。」

「私共では大抵、どなたかの紹介がある方にお願ひしていますので……。」

「紹介はありません。学校の紹介ならいつでも貰つて来ます。」

「いえ、それには及びませんけれど……。」

そういう対応がなお続いて、不得要領のうちに李は帰っていった。翌日、李はまたやって来た。学校の学生証と電車の定期券とを正枝に示した。

正枝は一瞥しただけでそれを却けて云った。

「私共は、はかより少し室代が高くなっていますので、不経済ですよ。」

「それは構いません。」

「それに、御勉強なさるのに自炊ではお困りでしょう。」

「食事は外でも出来ます。」

「外のお食事は、かたよって、身体にいかせんよ。」

「自分でも作られます。時々作っています。」

「それが、学生さんにはなかなかねえ……まあ、よくお考えなすっては如何ですか。」

また不得要領のまま、李は帰っていった。

その翌日、李は更にやって来た。そして一枚の紙を示した。「南京虫其他寄生虫の無之事を証明候也」という珍妙なもので、某アパートの主人の名前に捺印がしてあった。

「僕は嘘を云いました。友人が、南京虫がいると云って排斥するから、証明をしてくれと頼みました。」

正枝は呆氣にとられ、次に心を打たれた。半島出身者として特別扱いをしてると相手に思われたことが、心外でもあった。これまで正枝の対応はみな通例のものであり、現に春日荘の十四五人の居住者中の六人の大学生は、大抵紹介者のある人たちだった。学校を出た勤め人には自炊もよからうが、勉強中の学生には自炊は勧めむべ

きでないということに、正枝は特別の理論を持っていた。それらのことがみな、半島出身者という一事にこじつけられたらしいのである。そこで正枝は改めて、自説を繰返し述べて李を納得させ、その上で初めて、空いてる室を見せた。室は二つ空いていた。李は廊下の端の室を選び、正枝の承諾を強奪するようにして、早速その翌々日引越してきた。

前のアパートが気に入らない理由は、彼の云うところに依れば、毎夜遅く家の前で支那ソバ屋が悲しい笛を鳴らすこと、隣室に喧嘩ばかりする夫婦者がいること、独り者の若い女が多くて洗面所が穢いこと、女中たちが彼のことを李さんと云わずに李永さんと半端な云い方をすること、などであった。

彼は自ら云った通り、或は自炊したり或は外で食事をしたりした。交友は僅からしく、起居は静かで、始終読書に耽っていた。時々ひどく酩酊して帰ることがあった。人前をはにかむことなく、正枝や女中たちともすぐに馴れ親しんだ。厚顔と無邪氣とを一緒にした率直さというものがあるとすれば、そういう率直の感銘を人に与えた。正枝を「おばさん」と呼んで何でも相談するし、正枝もいろいろ面倒をみてやった。

余寒のきびしい初春の頃、淡く雪がきた日の夜遅く、二時頃、李はひどく酔っ払って帰ってきた。正枝も女中たちも寝ていた。けたたましく鳴り渡る呼鈴に、うとうととしていた正枝はすぐに起き上り玄關の方へやってゆくうちに、外の者が李であることを感ずいた。呼鈴のあとで暫くひっそりとなつて、今度は戸が激しく叩かれ「おばさん、おばさん」という声まで聞えた。それからまた静まり

返った。

正枝は玄関にじっと立っていたが、外の静けさがあまり続き、急に寒気に身震いして、そっと戸を開いてみた。薄曇りのぼーとした月明りで、露地の中の電灯線を途中で支えた小さな柱に、人影がしがみついてふらりふらり揺れていた。

「誰です、誰ですか。酔っ払って、こんなに遅く……。」

それでも返事はなく、柱にしがみついた人影は、やはりふらりふらり揺れていた。

「酔っ払った人は、一時すぎには家へ入れませんよ。一時までは許してあげます。一時すぎたら、自働電話でこわって、酔いがさめてから、翌朝帰っていらっしやい。何度も云っておいたでしょう。その通りになさい。酔っ払いは、こんなに遅くは家へ入れませんよ。」

「云うだけ云っておいて、正枝は戸を閉めてしまった。がそこに佇んで、外の気配に耳を澄した。

「おばさん、おばさん」と低い声がした。それから急に、わーっと泣きだした。子供が泣くような大声で喚きたてて、それが冗談なのか、本気なのか分らなかつた。正枝はじっと耳を傾けていた。やがて、泣き声がびたりと止んだ。しいんとなった。正枝は腹を立て、そのまま奥の居室に戻った。

そういう場合、もし女中が眼をさましたら、後で戸を開けてやることになっていた。女中のキヨもタカも、その夜眼をさました。正枝が居室に戻ってから、十分間ばかりたって、キヨが起き上り、玄関の戸を静かに開けた。戸のすぐ外に、李は地面に尻をつき両膝を

かかえて蹲まっていた。蹲まったまま動かなかつた。肩を揺られ名を呼ばれて、李はきょとんと顔を挙げた。眠っていたのである。手の甲で眼をこすり、大きな欠伸をし、キヨに援けられて立上り、よろよろとはいりこんで、靴をけはなし、スリッパもはかずに、夢遊病者のように階段を上っていった。

その朝のこと、タカが先に玄関に出かかると、帳場の窓の前に天井から、大きなものがぶらりと下っていた。タカは鋭い一声をたてて逃げてきた。キヨが、打震えてるタカと手を取りあい寄りそって、そっと覗きにゆくと、果して、窓の上の鴨居からぶらりと下っていた。足がなしいし、頭がなしいし、よく見ると、泥まみれの李の外套だった。それでも気味がわるく、二人は正枝を起しにいった。

正枝はいきなり玄関の中の電灯をつけた。明るくなってみると、下ってるのはただの汚れた古外套だった。椅子を持って来て取りおろさした。鴨居にあるのは小さな錆び釘で、正月の輪飾りをかけた残りのものだった。

正枝は腹をたてて、外套を持っていった。

終日、李は物も食わずに寝ていた。八度ばかり熱があると云つた。晩になると、正枝はキヨを李の室にやつた。解熱剤をあげるから来なさい、というのである。

李はおとなしく、着物にきかえ、温袍をひっかけて出て来た。片脛を長火鉢にもたせ煙管で炭を吸ってる正枝の前に、恐縮したようなお辞儀をした。

正枝はまず解熱剤をのませておいてから、いきなりやりこめた。「なんですか、昨夜のさまは。」